

## フランス第二帝政と名望家支配 — 政治エリートのプロソポグラフィを通して —

木 下 賢 一

**要旨** 第二帝政は、地方の名望家支配と中央集権的な国家権力とが対峙した時代であったが、本稿では、両者の関係を名望家と国家の双方から明らかにしようとした。

そのために、これまでに蓄積されてきた第二帝政期の政治エリート（県会議員、知事、コンセイユ・デタの評定官、立法院の代議士）のプロソポグラフィを中心に検討した。

第二帝政は名望家支配の上に権力を築かざるをえなかった。名望家の側も、秩序を回復し維持できる権力として帝政を受け入れた。帝政は、このような状況のなかで、普通選挙を権力の正当性の根拠とし、中央集権化を通して近代化を推進しようとした。

政府は、中央の政治家や高級官僚を県会議員や県会議長として大量に県会に送り込み、市町村長を任命し、官選候補者制によって名望家出身ではない「新人」を立法院に送り込んだ。さらに、知事に多くの権力を与え、名望家支配に対抗した。

帝政の推進したさまざまな経済政策と普通選挙は、徐々に名望家支配の基盤を掘り崩していったが、名望家の側も状況の変化に適応して、自らの支配を維持しようとした。地域により格差はあったが、帝政末期の名望家の一部は、その外観にもかかわらず、すでに七月王政期の伝統的名望家ではなくなっていた。

他方、政治エリートの上層部では明らかな変化が生じていた。彼らの大半は貴族と大ブルジョワジーからなる名望家によって占められていたが、県会議員の場合を除いて、貴族の割合の減少と大ブルジョワジーの増加という共通の変化がみられた。また、彼らのあいだでは、家門がなお決定的な力をもっていたが、中央の政治・行政機関の中核においては、すでに能力主義的傾向が浸透していた。さらに、彼らにとって経済と政治がそれまでにないような密接な関係をもつようになっていた。

**キーワード：**フランス第二帝政、名望家、プロソポグラフィ

### はじめに

最近フランスにおいて第二帝政史研究が活発化している。1995年には、チュラールが中心となって、200人の歴史家を動員した大部の『第二帝政事典』が刊行された<sup>(1)</sup>。また、1991年以来、第二帝政にとってのキーパーソンのひとりである企業家の伝記研究が都市ごとあるい

は県ごとに刊行中で、現在（2006年時点で）8巻まで出版されている<sup>(2)</sup>。全巻が完結すれば、今後の第二帝政の経済・政治・社会史の研究を大きく変えるような結果をもたらすかもしれない。

政治史においては、政治エリートを対象とした新しい研究が生み出されている。まずエリック・アンソーの1,000ページを越える大著『第二帝政の代議士たち——19世紀エリートのプロソポグラフィ——』<sup>(3)</sup>をあげることができよう。また、未刊ではあるが、フランシス・ショワゼルの元老院に関する博士論文も提出されている<sup>(4)</sup>。さらに、英国のプライスは、第二帝政の政治史に関するこれまでの彼の研究の集大成ともいえる仕事<sup>(5)</sup>を、矢継ぎ早に公刊している。

とくに、アンソーの仕事は、政治史研究における方法として、副題にもあるように、プロソポグラフィを中心にすえている点に特徴がある。アンソーは、シャルルにならってプロソポグラフィについて次のように述べている。「プロソポグラフィの狙いは、諸個人の略歴を明らかにし、それを豊かにすることによって、ある団体あるいはある人間集団の集会的な伝記をつくりあげることにある」<sup>(6)</sup>としている。具体的には、対象とするエリート集団の諸個人の諸側面を統計的に比較・分析することによって、そこから当該集団の構造や性格あるいは他の集団との関係を引き出す方法である。これは、つねに具体性と個人の多様性を損ねることなく、一般性を導き出していくための有効なひとつの方法であるといえよう。

第二帝政の政治史に関して、プロソポグラフィという表現をとってはいないが、実際にはこの方法を駆使した研究がこれまで蓄積されてきている。第二帝政期の県会議員<sup>(7)</sup>の分析にはじまり、コンセイユ・デタの評定官<sup>(8)</sup>、知事<sup>(9)</sup>、そして立法院の代議士<sup>(10)</sup>の統計的人物研究が公刊されてきた。これらの研究は、第二帝政期の主要な政治・行政機関を担う政治エリートの研究に基礎的なデータを与えているが、それがこれらの政治・行政機関のたんなる制度分析を超えた把握を可能にしている。これらの研究によって、第二帝政期の主要な政治エリート集団のプロソポグラフィが、ほぼでそろったといえよう。これらの研究を通して、第二帝政の政治構造の解明が格段に進んだといっても過言ではないだろう。

かつてテュデスクは、七月王政期のフランス社会の研究を通して、名望家支配の実態を明らかにし、それがたんに七月王政期の支配形態というだけでなく、伝統的社会から資本主義社会への移行期に出現する支配形態であることを明らかにした<sup>(11)</sup>。テュデスクによれば、この名望家による支配は、18世紀の半ばから第三共和政のはじめまでみられるが、とくに七月王政期に支配的な形態となったとする。この時期はまた、他方では、新しい経済体制と社会についての新しい概念が生みだされた時期でもあり、名望家はこのような移行期の指導集団を代表しており、貴族と企業家からなっていた<sup>(12)</sup>。

柴田三千雄は、テュデスクの名望家支配国家を、ヨーロッパ近代史の大きな理論的枠組みのなかで捉えなおした。氏は、重商主義的世界体制における国家構造を「社団国家」とし、産業

革命段階の世界体制における国家構造を「名望家国家」、また帝国主義段階の国家構造を「国民国家」と規定している<sup>(13)</sup>。そして、1880、1890年代のフランス政治を特徴づけているオボルトニスムを、名望家体制から大衆政治へ移行する時期の過渡的な政治路線とみており<sup>(14)</sup>、第二帝政に関しては、「ボナパルティズムは名望家国家の一形態」<sup>(15)</sup>であるとしている。しかし、テュデスクは、「名望家の支配は、中央権力の脆弱な時期と一致する」<sup>(16)</sup>としており、中央集権国家としての第二帝政との関係を明らかにする必要がある。また、第二帝政下に名望家の、全面的ではないにしても、衰退が始まっているのは確かであり、この事実をどう位置づけるかが問題となろう。

シャルルの場合、19世紀に名望家支配社会から能力主義的 *méritocratique* 社会<sup>(17)</sup>への移行がなされるとみなしている。後者の社会は、前者の内部で、1830年代から1880年代に形成されていたとし、1870年代に転換点をおいている。

テュデスク、柴田、シャルルの三者はともに、名望家支配を、伝統的社会から資本主義的産業社会への移行期に出現する支配構造とみなしている点では一致している。ただ、第二帝政の位置づけに関してかなり異なっている。テュデスクの場合は、あきらかに第二帝政は名望家支配の衰退期であり、その結果が第三共和政に露わになるとみるのに対し、柴田の場合は、第二帝政を名望家支配の一形態と規定しており、名望家支配の終焉はずっと後に起こることになる。シャルルの場合は、伝統的な名望家支配と能力主義的な社会が並行して進んでいるとみる。そして、第二帝政期に根本的な変化が生じているにしても、この時点ではまだそれが名望家支配にとってかわるまでにはいたっていないとする<sup>(18)</sup>。

第二帝政による上からの強力な近代化と中央集権化の推進、それに加えて普通選挙の実施が、名望家支配を足元から突き崩しつつあったと考えられるが、しかし、後にみるように、たとえば名望家の典型である県会議員の出身社会階層や職業をみると、帝政末期のそれと名望家の最盛期であった七月王政期のそれとのあいだにほとんど変化がみられない。また、彼らは帝政期に経済的にはむしろより繁栄しており、それどころか帝政末期には貴族出身の県会議員の割合が増加さえしている。これらの事実をどのように考えればよいのだろうか。

以下では、これまでの第二帝政の政治エリート（ここでは、県会議員、コンセイユ・デタの評定官、知事、立法院の代議士）のプロソポグラフィをふまえて、論点を主に中央集権国家としての第二帝政と名望家支配の関係に絞って検討し、第二帝政の政治構造の一端を明らかにしたい。

## 第1章 県会議員と名望家

### 第二帝政の政治・行政組織

第二帝政期の政治エリートをとりあげる前に、まず、第二帝政の政治・行政組織を概観して

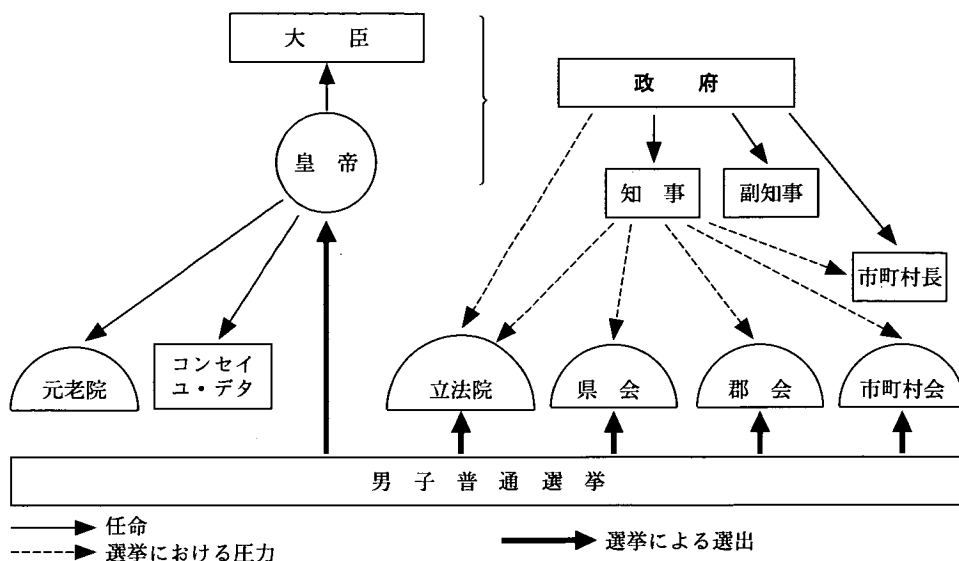


図1 第二帝政の政治・行政組織

おこう（図1参照）<sup>(19)</sup>。

これらの組織は、帝政樹立以前に発布された1852年憲法に基づいているが、任期10年の大統領が世襲の皇帝になった点を除いて、基本的な構造は帝政樹立前後で変化していない。内閣は皇帝が任命する。コンセイユ・デタも皇帝が任命し、法案を起草する。立法院は普通選挙によって選出され、法案を討議し、採択するが、行政権を統制する権限はない。元老院は、枢機卿、元帥、提督それに皇帝によって指名される終身議員からなり、憲法遵守の監視者の役割を果たす。皇帝は国家意志の唯一の保持者であり、唯一の執行権力である。内閣は、彼に対してのみ責任をとる従順な存在である。皇帝は、自分の都合の良いときに、人民投票という方法で、国民に対してのみ責任を負う。他方、普通選挙に基づく議会である立法院は、立法府としての権限の一部を剥奪され、皇帝に対して従順なコンセイユ・デタと元老院によって掣肘されていた。地方議会である県会、郡会、市町村会は普通選挙で選出されるが、県会議長、郡会議長、市町村長は政府と知事によって任命される。

### 名望家とは

本章では、ジラルールとプロストおよびゴセの『1870年の県会議員』<sup>(20)</sup>を中心に帝政末期の県会議員について検討したい（なお、煩瑣をさけるため、第1章における本書からの引用はすべて本文のなかに括弧付きで該当ページを示し、註は本書以外の文献の引用に限った）。県会は地方議会のなかでは一番上に位置している。県会議員の人数をみると、1870年時点で、全体として89県2,921議員からなるが、最も多い県会で62議員、最も少ない県会で17議員、単純平均では1県会当たり32.82人の県会議員がいることになる（pp.192-193）。ジラルールら

の研究は、そのうち 2,798 議員（全体の 96%）のデータを収集しており、全県会を網羅している。また、これと比較し変化をみるために、1848 年と 1852 年の県会議員各々 1,533 名と 1,918 名のデータも収集している。県会議員の任期は 9 年で、3 年ごとに 3 分の 1 ずつ更新される。

県会議員の多くは名望家であった。ジラルは、県会議員を調べることによって、「第三共和政前夜（第二帝政末期—引用者）の地方の名望家」（p. 27）をあきらかにできるとしている。名望家の概念は、人により微妙に相違しており、一義的には定義できない。テュデスクによれば、名望家とは「同郷人によって知られており、彼らを指導し、代表し、左右する能力があると彼ら自身によって認められている人物」であり、「名望家の支配は、社会の法的区分がもはや社会的・経済的發展に対応しなくなった時代に生まれ、他方、都市集中が輪郭をとりはじめてはいるが、なお部分的な社会事象である時代に、花開いたのである」<sup>(21)</sup>。また、「名望家は、階級に分かれてはいるが、階級意識がなお存在していない社会における指導者の集団を代表している」<sup>(22)</sup>とも述べている。この移行期の社会にあって、名望家は、地域と全国、同郷人と国家を仲介し、活気はあるがなお局地的である都市と農村世界を結びつけたとしている<sup>(23)</sup>。

ジラルは、次のように述べている。「名望家は、彼を一群の農村共同体の代表にした選挙をととして、社会的・行政的影響力を兼ね備えることによって、行政と村長たちの間の不可欠の媒介者になりえた。このようにして、選挙で選ばれた特権階級が登場するが、彼らはある場合には、衰退しつつある伝統的な特権階級にとってかわったが、ある場合にはそれを強化した」（p. 3）。

アンソーは次のように述べている。「名望家の影響力は、保護—被保護関係 *clientélisme* に基づいている。この関係は、非公式で暗黙の契約による二人の人間の間の不均衡な利益と奉仕の交換として定義できる。名望家は、その選挙の一部を、彼のために投票したかあるいは投票させた被保護者に負っている。名望家は、新しく得た地位によって、被保護者に利益を与えることで彼に対して義理を果たすことが可能になる。彼はこうして支配的地位の代償を払う。彼の被保護者はそれを恩に着ることになる。終わりのないこの交換過程は、名望家の権力とわがちがたく結びついている」<sup>(24)</sup>。そして、彼の場合は、名望家をもう少し広くとっている。「名望家とは、地域ないしはローカルな次元の代表、すなわち県会の議長から村会のたんなる議員まで、を務めており、その社会的信用と人間関係によって、自分の市町村民の利益を高度な次元で擁護できる人物である」<sup>(25)</sup>。

## 職業と社会階層

まず県会議員の職業からみてみよう。1870 年時点での県会議員の出身職業は、地主が 33.6 %、自由業が 30%、官僚が 21%、実業家が 15.5% の割合であった（pp. 45-46）。そして、何よりもその割合の恒常性に特徴がある。というのも、第二帝政はじめにおいても（p. 46）、

1840 年と比較しても (pp. 48-49), ほとんどこの割合に変化がみられないからである。このような出身職業の割合の恒常性が県会議員の一つの特徴である。

他方, 職業の割合は変化していないが, 議員自体は大幅に入れ代わっている。1848 年時点で七月王政期の県会議員の 56% が落選しており, 生き残った者も 1852 年の選挙では半分が落選しており, 帝政初期の県会議員の 73% は, 1848 年以前には議席をもっていなかった。「県会議員の出身の社会学的安定性は際立っている。議員の 4 分の 3 が淘汰されたにもかかわらず, その後継者は同じ社会・職業カテゴリーに属している。人を変えたが, 環境は変えなかったのである」(p. 50)。あるいは, 「多くの人が追い払われたが, 彼らにとって代わった人びとは, 彼らと兄弟のように似ていた。彼らは同じ社会集団と同じ政治集団に属していた。この大変動が終わるや, — それは県会をほんの数インチ移動させただけだったが — 県会是不変性の深い眠りにおちいったのである」(p. 170)。

「県会議員はほとんど全員, 中流ブルジョワジーと大ブルジョワジー, すなわち法律家, 司法官, 影響力のある官僚そして産業家あるいは地主たちに属している。名望家の終焉を予感させるものは何もない。むしろわれわれが眼前にしているのは, 絶頂期にある名望家である」(p. 53)。第二帝政が直面したのは, まさにこのような地方名望家であった。しかし, ジラールたちの研究は, 七月王政期に支配的であった名望家が, 同じ地域の別の名望家にとって代わられたことがもつ意味については十分に検討していない。

## 財 産

県会議員のあいだの財産の開きは非常に大きく, 最も富裕な者と最も貧しい者との間には 100 倍もの差があり, 名望家というひとつの社会集団に括ることは難しい (p. 55)。しかし, 「大半の県会議員は非常に裕福というのではないが, 貧しい者は非常にまれである。ゆとりある生活というのが一般的である」(p. 56)。財産の最下位グループに位置しているのは, 医者, 公証人, 下級官吏であり, 「これらの職業のメンバーが『名望家』であるとするなら, 彼らはそれを彼らの財産によるよりも, その能力に負っていることは疑いない」としている (p. 64)。第三共和政になると医者の社会的地位は上昇するが, 第二帝政期にはなお低かった。他方, 財産の最高位グループは, 実業家, 高級官僚, 士官, 地主である。「このような人物はたとえ能力がなくても, 彼らの富が, ほとんどの場合, 彼らを名望家にするに十分であるだろう」(p. 64)。また, 中間グループとしては, 弁護士, 司法官が位置しているが, 彼らはしばしば「財産による名望家」というより, 「能力による名望家」ではあったが, 収入の点で医者や公証人に比べると大きな差が存在した (p. 64)。議員になった医者 2 人に 1 人は, 年収 8,000 フラン以下なのに対し, 地主貴族は 2 人に 1 人が年 30,000 フラン以上の収入をえていた (p. 72)。「全体として, 最も裕福なカテゴリーは, 1870 年において, 30 年前と同じように土地貴族のそ

れであった。産業化と経済発展にもかかわらず、彼らの古くからの優位性は持続した。しかし、それは実業ブルジョワジーの富裕化によって脅かされていた」(p. 83)。

### 名望家のタイプ

ジラルは、影響力の観点から、名望家を次の4つのタイプに区別している。

#### (1) 小郡次元の小名望家

「階層制の底辺に、小名望家あるいは小郡次元の名望家が位置する。村会議員になることで名望家に到達した豊かな農民、医者、そしてとりわけ公証人。これらはけっして権力者というのではない。彼らの財産は小さく、体面を保って生きるだけの余裕はあるが、それ以上ではない。普通彼らは、自分が県会において代表する小郡に住んでおり、彼らの影響力がその範囲を超えることはまれである。なぜなら、彼らの影響力は、まさにこの小郡の枠組みのなかでなされている彼らの職業活動と結びついているからである。…それは小郡次元の名望家であるとともに能力による名望家である」(p. 92)。

#### (2) 小郡次元の財産による名望家

「地主と産業家が名望家の第二のタイプをなす。それはなお小郡次元の名望家である。彼らは選挙区に住んでおり、進んで自治体の職務を引き受ける。この点では、前のタイプと区別されるものは何もない。しかし、彼らの財産が彼らを前者から分ける。それは実際しばしばかなりなもので、つねに全体の平均を上回っており、しばしばかなり上回っている」(p. 93)。

前二者に共通することとして次のように指摘されている。「これら二つのタイプに共通するのは、安定性である。これらの名望家は、深く根付き、非常に強力な個人的な地位をもっている。最も才覚のある者、最も裕福な者は、それを全国的な政治的経歴の出発点にして、代議士に立候補することができる」(p. 93)。

#### (3) 「地位」による名望家

これは、政府高官、士官、上級司法官、最も裕福な地主貴族などで、「その名声が外からきており、自分の選挙区には住んでいない人びと。それは、よそ者の名望家である。彼らは県の問題の行く末に、おそらく最も決定的な影響力を行使する。彼らの権威は、しかし、彼ら個人よりも彼らの地位に依拠している。彼らは、紹介されたときにその肩書きがなかったなら、地方では知られることはないだろう」(p. 93-94)。

#### (4) 郡庁所在地の名望家

「弁護士、下級司法官、銀行家が、何人かの医者、商人とともに、県会議員の最後のタイプをなす。前三者よりも非均質的なタイプで、実際、中間的なタイプである。彼らと他の者との間の境界は不明瞭で、類似点が多い。主要な相違は、彼らの職業活動の枠組みにあり、その活動はローカルにとどまっているが、いくつかの小郡に及んでいることである。…彼らは、郡庁

所在地でかなり知られており、その法律あるいは財政的な能力によって評価されているが、彼らはこの郡庁所在地を代表する一種の使命をもっている。…それはけっして財産による名望家ではなく、これらの能力による名望家は郡庁次元の名望家である」(p.94)。

これら名望家の四タイプの区別の基礎にあるのは、「財産による名望家」と「能力による名望家」の区別である。これは名望家のなかの二つの要素、伝統的な要素と新しい能力主義的な要素を代表している。しかし、たしかに後者は新しい方向を示していたとしても、両者が相容れないということはなかった。おそらく「能力による名望家」は「財産による名望家」になろうとし、「財産による名望家」は時代の大きな変化のなかで生き残るためには、「能力」の必要性を感じていたであろう。「財産による名望家」は、最初から財産以外にも多くの「文化資本」を有しているがゆえに、「能力による名望家」への転換においても有利であることはまちがいない。伝統的名望家といえる地主貴族は、第二帝政下に経済的にも発展を遂げるが、これは貴族が、農業技術の改良に専念し、農業の資本主義的経営を推進したからであり、「財産の名望家」がつねに変わらなかったのではない。

#### 県会議員の兼任

県会議員は地元の名望家だけが選ばれたのではなかった。第二帝政期の県会議員の特徴として、他の議員や行政職の兼任がきわめて多かったことを挙げることができる。国家次元の有力者の多くが県会の議員や議長を兼ねていた。たとえば、1853年の県会議長のリストをみると、7人の大臣、19名の元老院議員、30名の代議士、4名のコンセイユ・デタの評定官がみられる。中央と関係のない名望家の議長は、11名だけであった<sup>(26)</sup>。また、第二帝政期を通じて、大臣の3分の2、コンセイユ・デタの評定官の5分の3、代議士の5分の4以上が県会議員を兼ねていた。そのうち、27名の大臣、43名の元老院議員、77名の代議士が県会議長を務めている。これは議長全体の3分の2を占めていたことになる。残りの議長の所属も考慮すると、県会議長の5分の4は、中央で強固な地位を占めていた者であることが明らかになる<sup>(27)</sup>。

このように非常に多くの中央の政治家や行政官が、県会の議長あるいは議員を兼職していたという事実は、大物政治家を県会に送り込むことによって、帝政政府が地方の名望家支配に楔を打ち込もうとしていたとみることができる。また、政府は、立法院の官選候補の指名や県会と郡会の議長および市町村長の任命を通して、いわば人事権を利用して地方の名望家をコントロールしようとしたと考えられる。ただ、この場合も代議士は微妙な立場にあった。彼らは官選候補者として政府に加担している一方、普通選挙で選出され地方の利益を代表してもいたからである。



### 貴族の影響力

第二帝政期の県会議員における貴族の存在は注目される。貴族は時代遅れになってしまうのではなく、かえってその影響力を増大させている。そのことは、まず県会議員のなかで貴族が占める割合を検討してみるとわかる。1870年時点で、県会議員のなかに占める貴族出身者の割合は、27.6%に達する(p.117)。1840年においては、県会議員の6人に1人が貴族であったが、1870年には4人に1人以上、ほとんど3人に1人が貴族出身であった。貴族出身者が非常に多いだけでなく、その割合は第二帝政期にむしろ高くなっているのである。1870年において、貴族はひとつの政治勢力をなしていたのである(p.118)。ただ、後にみるように、他の政治エリートの知事や立法院の代議士の場合は、第二帝政期に貴族の割合が低下している。

また、貴族は経済的にも優越していた。貴族の県会議員の2人に1人は、百万フラン以上の財産をもっていた(p.119)。貴族は、このように、一つの政治権力であっただけでなく、経済権力でもあった。「貴族の政治的・社会的権力は、本質的に経済的基礎に依拠している。それは、土地所有であり、借地農、債務者そして大土地所有者に恩義を受けている者を結びつける従属的なつながりである」(p.127)。貴族の間で支配的な名望家のタイプは、前述の名望家のタイプでいうと、財産による小郡の名望家と、地位によるよそ者の大名望家である(p.122)。貴族は名望家であるが、自ら指導者であろうとし、そうであると考えている名望家であり、1870年においては、彼らは少数の大ブルジョワジーとともに、フランス社会の「エリート」を構成していたといっても過言ではなかった(p.129)。このように、帝政の中央集権的権力にもかかわらず、地方においては名望家による支配は揺るぎなかった。

### 政治的意見

政治的意見に関しては、三つのグループに分類される。第一のグループは、非政治主義で、最も人数が多い。第二グループは、帝政への加担者で政治的意見をもつが、実際の行動では行政に対して献身的である。第三のグループは、政府反対派である。各グループの割合は、非政治主義者が議員の3分の2近く(60%)、加担者が4分の1ほど(24.2%)、反対派が16%となっている。反対派のなかには「疑わしい」者も含まれているので、固有の反対派の議員に絞ると、3.4%になる(pp.133-134)。

以上から非政治主義者と加担者がほとんどであることが判明する。強力な反対派というのも、昇進や勲章あるいは立法院の官選候補への個人的な野望を挫かれたためであって、政治的反対派というのでないことがしばしばであった(p.135)。「この時代のフランスは、自分たちの重要性和それを尊重する政府に満足したローカルな名望家による共同の一致によって支配されていた。職業の階層制も対立する政治傾向に明確な分裂をもたらすことはなかった。名望家

の世界の深い一致は明白であるように見える (p. 152)。

### 第三共和政と名望家

第三共和政になっても、名望家が県会を支配していた。「第三共和政の最初の 10 年に県会の議員の民主的拡大について語ることはできない。…1882 年においても席を占めているのはつねに同じ名望家であると判断せざるをえない」(p. 179)。あるいは、「とくに、貴族であろうとブルジョワであろうと、地主は彼が非常に重視している地域の名望家の役割を果たし続けている。議会や政府の次元での発展を考えると、名望家の終焉の印象をもってしまうが、この表現は雄弁ではあるが、おそらく過剰であろう。ローカルな次元では、名望家は非常に頑強に抵抗した。彼らは、少しずつ共和主義者になっていったとしても、他の社会集団に席を譲ることはなかった。県会議員に関しては、名望家の世界はゆっくり共和国へすべり込んでいったが、共和国もその世界を破壊しなかったのである」(p. 180)。

ここで示唆的なのは、他の社会集団に席を譲ることはなかったが、名望家自体が徐々に共和主義へ転向していったことである。これは、名望家が状況に合わせて自ら変化を続けていたのだということであり、その外見にもかかわらず、もはや 19 世紀前半の名望家と同じ社会集団ではないということを示している。

### 名望家支配と帝政

第二帝政が統治しようとしたフランスは、このように名望家によって支配されていた。帝政は名望家の支配の上にしかその権力を築くことができなかったのである。彼らと直接対峙しなければならなかった知事たちは、そのことを熟知していた。

「しばしば、名望家なしで済ますことは不可能であった。彼らは地域に非常に深く根づいていた。なんびとも彼らと対抗できなかった。大統領ナポレオンが使った知事たちは、ほとんどがルイ・フィリップのもとで任命されていたが、彼らは名望家を無視することはできないと考えていた。彼らは、大衆は名望家の影響下にあり、大衆は名望家を媒介することによってしか政府に投票することに同意しないと確信していた。それゆえ、これらの知事たちの考えでは、問題は、名望家と折り合いをつけ、彼らを体制に加担させることであった。この弱気な政策は、結果として、まことの王朝である名望家の影響力を強化しないまでも、維持することになった」<sup>(28)</sup>。

地方において名望家支配が揺るぎなかったとしても、大部分の名望家は帝政に加担した非政治主義者であり<sup>(29)</sup>、秩序を維持してくれる帝政に満足しており、彼らのほとんどはそれに抵抗するということではなかった。

## 第2章 知事と名望家

この章では、ル・クレールとライトの『第二帝政の知事たち』<sup>(30)</sup>を中心にして、知事と名望家の関係を検討したい（なお、煩瑣をさけるため、第2章における本書からの引用はすべて本文のなかに括弧付きで該当ページを示し、註は本書以外の文献の引用に限った）。本書は、第二帝政期に任命された総計220名の知事のデータを元にしたプロソポグラフィである。

### 帝国知事の任務

知事は地方において中央政府を代表している。それゆえ、知事は地方を支配する名望家に対して中央権力として直接対峙することになる。ここでは、知事と県会および市町村会との具体的な関係を通して、名望家と帝政の関係をみることになる。

第二帝政の知事は、帝政の統治にとってきわめて重要な位置を占めていた。ナポレオンは、地方における知事の権力と影響力を強化し、立法院の代議士や他のすべてのローカルな影響力を殺ごうとした（p.46）。県庁が地方の行政と政治の中心になり、地方行政に関しては、知事に権限を移譲すること（これを「地方分権化」と称していた）によって合理的かつ効率的に治めることができるとみなされた。知事は自分の県の下級役人の任命権をもつことになった。また、市町村の組織に関しては、知事は、県庁ないし郡庁所在地以外の自治体で、人口が3,000人以下の市町村長と助役を任命する。知事は市町村長を、市町村会の議員以外から任命し、停止し、罷免できる。また、知事は市町村会を2ヶ月間停止することもできた。

知事的主要任務としては、権力の代表、県行政とローカルな集団の監督、警察の指揮そして政治的指導があった（p.49）。知事にとって立法院選挙の官選候補者の選定と選挙に勝利することは最も重要な任務の一つであった。選挙における成功が知事の力と有効性の最も確実な証とみられ、その結果は昇進に直結していた（p.70）。

また、地域の経済の発展や社会的分野においても寄与した。「知事が、しばしば地元の名望家の意向に反して、経済と下層階級の運命の改善に与えた、本当の活力、実際的な刺激を、知事の功績にしないことは、不当であるし、不正確でもあるだろう」（p.74）。知事は、自由貿易の支持者であり（p.77）、帝政の経済の近代化を、場合によっては名望家に抗してでも、推進した。

このような第二帝政期の知事の権力を示す表現として、次のような例が挙げられている。「県の専制君主」、「知事の黄金時代」、「県の魂」、「地方における政府の行動の一体性の要」（p.44）。

前章でみたように、帝政は地方の名望家支配を受け入れ、その上に自らの権力を築かざるをえなかった。しかし、中央集権化を通して、フランスの近代化を推進しようとしていた帝政に

としては、このような状態を続けるわけにはいかなかった。

何人かの知事は、七月王政下につくり出された名望家の影響力のネットワークを一掃しようとする非常に強い意志を示していた。内務大臣ペルシニーは知事たちに次のように述べた。「今日では、選ぶのは大衆であって、古い有力者ではない。…重要なことは、権力の手がこれらの古い有力者が立っている土台をすくなくとも掘り崩していない小郡が一つたりともないことである」<sup>(31)</sup>。オート・ロワール県の知事は次のように述べている。「これまで、行政はあれこれの徒党の言いなりであった。…今こそ、政府がけっして失ってはならない強い立場を取り戻す好機である。…われわれの厳しい農民の信頼を得るためには、力強い権力が、罰した保護できることを、彼らに示す必要がある」<sup>(32)</sup>。これらの証言は、現実に地方を支配しているのが名望家であることを裏書きしているとともに、名望家支配と一線を画そうとする政府と知事の強い意思も示している。

### 知事の社会学

知事の出身階層でいうと、表1のように、ブルジョワジー出身が最も多く、貴族出身がほぼ同じ人数おり、両者だけで82%を占める。しかし、小ブルジョワジー出身が、少ないとはいえ17%もいるのは、能力主義的な要素がそれなりに浸透していることを示していると思われる。出生地に関してはセーヌ県出身が220名中49名（パリ出身は45名）であり、2位が8名で5名以上の知事を出している県はパリ以外では6県のみである（p.176）。知事任命時の平均年齢（1860年以前）は44.5歳（p.177）。父親の職業に関しては、「知事は、その大半が、文官か武官の息子であり、家族の伝統が彼らを、そして彼らの兄弟あるいは姻戚と同様に、官僚への道に向ける。しかし、行政への志向が政治行動へのそれにまざっている」（pp.178-179）。また、家族のつながりが強く、たとえば知事の息子は21名、家族と軍隊とのつながりも強く、将軍の息子が16名、女婿が14名いる（pp.179-180）。

表1は、知事の出身社会階層について、帝政初期、中期、末期についてみたものである。貴族出身の知事の数は一貫して減少傾向にあり、1852年には半数以上（52.87%）であったが、1870年には3分の1強（36.05%）になっている。しかし、貴族出身の割合は、第二帝政の行政のなかでは、知事は外務省と参謀部について多い。ただ、貴族出身の知事の5分の3は、ナポレオン

表1 知事の出身社会階層別人数（p.181）

	1852年	1860年	1870年	計（%）
貴族	46	34	31	88(40)
ブルジョワジー	26	40	45	91(42)
小ブルジョワジー	12	12	10	38(17)
下層階級	3	—	—	3(1)

1 世の帝国貴族である点に特徴がある (p. 183)。県会議員の場合は、帝政期に貴族出身の割合が高くなっていたが、後にみるように、立法院の代議士においても知事と同様に貴族の減少とブルジョワジーの増大傾向が明瞭であり、政治エリートの上層部では変化があらわれている。

教育に関しては、パリ大学法学部出身が圧倒的で、220 名中 130 名を数える。他方、高等教育を受けていない知事は 14 名のみである (p. 189)。彼らは大学を卒業後、弁護士 (84 名)、軍隊 (26 名)、中央官庁 (24 名)、地主 (19 名)、県行政官 (17 名)、コンセイユ・デタの傍聴官 (17 名) などにつき、まず郡長、次いで知事に任命されるのを待つ (pp. 192-194)。彼らは、高等教育を身につけ、知事に任命される前に十分な専門的知識と経験をもった能力ある者たちであった。

### 知事と名望家

第二帝政期の知事は、貴族あるいはブルジョワジーの出身で、教育も教養もある政治エリートであり、自らの県において政府を代表し、非常に大きな権限を有していた。しかし、彼は日々地方の名望家とその社会的・政治的支配に対しなければならなかった。彼が相手にするのは、てだれの政治家であり、強力な実業家であり、裕福な地主であった。彼らは、自分たちの地盤と永続性に自信をもっていたので、一時滞在の官僚である知事よりも、中央に対して地元の利益を代表することに習熟していると主張していた (p. 141)。

知事が相手にしなければならないのは、たとえば次のような人物である。

「ある医者のあるところを信用すれば、小郡には小さな独裁者がいて、自分の好悪によって、郡長や知事を鼓舞した。自分の友人を保護し、敵を追求した。市町村長と助役、市町村会の議員の指名を意のままにした。田園監視人の全体の保護者になり、若い新兵には自分の誠意を約束し、警察署長と憲兵には昇進を約束した。自分の共同体と周辺に過剰な道路を獲得し、あらゆる行政の恩恵の分配者になった」 (p. 134)。

前章でみたように、代議士や、元老院議員、コンセイユ・デタの評定官などが県会議員を兼任する場合が多く、知事が、彼らに、あるいは彼らのあいだの対立に対処することは困難であった (p. 134)。大名望家のなかには、県を自分の所領のように考える者もいて、知事は厳しい立場におかれた。「知事にとって、ローカルな次元と同時に、中央でも影響力のある人物と良好な関係を維持することが、すぐさま不可欠であるようになる。…彼らの大部分は県会の議長職にあり、県を自分の領地とみなしていた」 (p. 135)。

こうして、「大多数の知事は、自分たちの特権を意識していたにもかかわらず、すこしずつ名望家と妥協し、最終的に、帝政初期のスタイルとは異なるスタイルを採用することになる。A.-J. テュデスクが強調するように、『県会議員は、県会よりもっと大きな重要性をもっている』。彼に認められている権力 — それはかなり限られたものであるが — 以上に、県会議員は、

その影響力、道徳的権威をもっている。彼がバリとの関係をもっているか、全国次元でかなりの人物である場合はなおさらである」(pp. 133-134)。

知事は、実際には、帝政初期に規定されていたような大きな権力をもった存在ではなかった。秩序維持において知事を補佐するのは憲兵、市町村長、警察署長であるが、警察はしばしば市町村長の統制下にあった。また、田園監視人も市町村長に従属していた。さらには、県職員の数も不十分であった (pp. 125-126)。それだけでなく、帝政に忠実な県職員も少数派であった。オート・ガロンヌ県の知事は、県庁の職員に関して次のように嘆いている。「『帝政派』の職員は 53 人だけで、それに対して 629 名が正統王朝派で、241 名がオルレアン王朝派であり、共和主義者が 53 名である」(p. 82)。

また、帝政初期と比べて市町村長の任命における権限が減少していった。1855 年には、すべての市町村長の任命は内務大臣の承認を必要とするようになり、1865 年からは市町村長の任命は市町村会の選挙後に、しかも市町村会の議員のなかから選ばなければならなくなった。

しかし、より本質的な問題は次の点にある。知事は、本来自分が治めている県とのつながりが薄いほど都合が良かった。というのも、ローカルな次元の利益の対立に巻き込まれると、結局誰をも満足させることができなくなるからである。帝政期の知事 220 人のうち、自分が生まれた県を治めていたのは 9 人だけであった (p. 48)。しかし、これは知事の弱点にもなった。知事の一人は次のように書いている。「知事は自分の県に根をもっていない。彼はそこでは不信をもたれている中央権力の代表でしかない」(p. 140)。他方、県会議員も、また県会議員を兼ねる立法院の代議士も普通選挙によって選出されているので、政府を代表する知事より住民の意思を代表していると主張できた。

### 知事の非政治化と官僚化

知事は、政府の方針転換とともに、政治的活動を控え、行政に専念するようになった。それとともに、専門化と官僚化が進展していった。1860 年末に内務大臣から知事へ出された次の通達は、地方の名望家との和解と協調を訴え、名望家の力に依拠する必要性を説いている。「旧政府の多くの尊敬すべきまた優れた人びとが、皇帝が成就した偉大な事績に対して皇帝に称賛を送りながらも、個人的尊厳の感情から、なお距離をおいている。彼らに値する敬意を彼らに示すように。彼らの知識と経験を国に役立てるよう彼らに勧めるいかなる機会をも見逃さないように。そして、彼らに次のことを想起させるように。追憶への愛着を保持することは高貴なことであるが、自分の国に役立つことはさらにもっと高貴なことであるということを」(p. 160)。

知事の専門化と官僚化をよく示しているのは、帝政下の 220 名の知事のうち 178 名が副知事(郡長)から任命されていることである (p. 187)。とくに 1858 年以後、外部からの任命が

急減し、副知事からの昇進が増加する (p. 206)。また、知事になるためのコースが固定化されていく。県参事会のポストは、かつては土地の名望家にとっておかれた、パートタイムの名誉ある定員外の職であったが、いまや県庁での経歴における最初の職階になった。元知事の一人は次のように不満を漏らしている。「県参事会は、その定員外の制度を、副知事（郡長）になるために使うよう定められたたんなる行政学校になってしまった」(p. 208)。

専門化と官僚化の進展とともに能力の重視が明確化する。「次のようにいうほうが正確であろう。たとえ庇護者が不運から救い、任命と昇進を容易にするとしても、彼が一つの職を保証することはできず、最終的には結果によって評価する大臣さらには本省によって経歴が決定される、と。第二帝政は、考えられているほど恩恵が左右したわけではない。能力が最終的に最良の資格である」(p. 278)。このように、知事の主たる出身社会層であるパリのブルジョワと帝国貴族という限られた枠組みのなかではあるが、能力主義的原理が浸透しつつあったといえよう。

最後に、著者は帝政下における知事を次のように位置づけている。「帝国知事は、知的で、しばしば教養があり、ほとんどつねに勤勉で、国家のセンスをもっており、実際の、効率と社会的・経済的進歩に熱心で、ときには人気があったが、法律のテキストが想定しているほどの権力と手段はもっていなかった。彼らは体制の政治的発展の犠牲になったとほとんど考えたくなる。知事をナポレオン三世の最も直接的な代表にするという、統治の初期に示されたナポレオンの意思と、…最終的に代議士とローカルな名望家にかつて以上の影響力を与え、パリにかつて以上の介入の手段を与えるにいたる実践とのあいだにあまりにも大きな相違が存在していた」(p. 311)。

知事は、名望家の支配を打破し、中央集権化を実現しようとして挫折したが、しかし、経済と行政の近代化において一定の役割を果たした。これがやがて地方の名望家の基礎を徐々に掘り崩していくことになる。

### 第3章 コンセイユ・デタと帝政

1852年憲法によると、コンセイユ・デタの主要な任務は、立法権、行政権、司法権の三権のすべてに関与しており、共和国大統領の指揮下に、法案を起草し、立法院での討議においてこれを擁護する。また、行政問題、行政訴訟、行政権と司法権の権限をめぐる争いに関する政令を立案し、大統領と大臣によってコンセイユ・デタに提起されたすべての問題について自らの意見を提出することができる。コンセイユ・デタは、このように憲法の規定では大きな権限をもつ国家機関であった。また、ナポレオンはコンセイユを執行権を補佐する機関として重視していた。

### コンセイユ・データの組織構造

ここでは、ライトの『第二帝政下のコンセイユ・データ』<sup>(33)</sup>を中心にして、コンセイユ・データと帝政の関係を検討してみよう（なお、煩瑣をさけるため、第3章における本書からの引用はすべて本文のなかに括弧付きで該当ページを示し、註は本書以外の文献の引用に限った）。ライトは、帝政期に評定官に任命された総計119名の個人データ（pp. 213-221）を元に、コンセイユの組織とその変容を明らかにし、それを帝政の政治構造のなかに位置づけている。コンセイユ・データの場合、中央機関として政府や立法院と関わるが、地方の名望家と直接の関係をもたない。しかし、出身階層からみると、若干中流ブルジョワジーが多いとはいえ、他の政治エリートと同じように大半が上流階級出身である。

コンセイユの組織は常任評定官と、非常任評定官（最大20名）の2つの要素からなる。後者はかつての常任評定官で、純然たる名誉職であり、総会に出席することも採決に参加することもできない。常任評定官には2種類あり、コンセイユの6つの部会のいずれかに属する評定官（40～50名）と、コンセイユの部会には所属せず、他の国家機関の正規の職にあり、評定官としては給与を得ていないが、総会に出席し採決に参加する権利をもつ常任無任所評定官（15～21名）がある。ライトの個人データ119名は前者に関するものである。

コンセイユの階層制のなかで、評定官の下にあるのが調査官でさらにその下にあるのが傍聴官である。どちらも各々40名任命される。

### 評定官の社会学

次に彼らの出身階層をみてみよう。表2は、評定官の父親の職業を示しているが、産業家、大商人、地主、官僚、自由業がほとんどで、この時代の他の政治エリートと変わらないといえよう。

表3は出身社会階層を示しているが、単独の社会階層としては、中流ブルジョワジーが最も

表2 評定官の父親の職業（p. 57）

産業家と卸売商	18	コンセイユ・データ評定官	5
地主	15	医者	5
代議士	14	手工業者と小商人	4
軍人	9	外交官	3
下級官僚	9	代訴人	3
高級官僚	8	教授	3
司法官	7	弁護士	2
知事	7	不明	1
公証人	6	合計	119

表3 評定官の出身社会階層（p. 57）

貴族	30
大ブルジョワジー	27
中流ブルジョワジー	46
小ブルジョワジー	11
下層階級	5
計	119



多いが、貴族と大ブルジョワジーを加えた上流階級は 57 名で 47.90%を占めている。

学歴をみると、95 名 (79.83%) が法学部出身で、多くは成績優秀であり、そのうち 18 名は法学博士の学位を取得している (p. 64)。また、彼らの 4 分の 3 (1852 年) そして半分以上 (1860 年と 1870 年) が弁護士として登録しており、法律の実務の経験をもっている (p. 47)。たとえほとんど上流階級と中流ブルジョワジーの枠内であるとしても、能力主義がすでに浸透していることを示している。また、出生地はパリに集中していて、32 名 (26.89%) を数えた。2 位でやっと 5 名である (p. 56)。任命された時点での年齢の平均は 51 歳 (p. 50) で、すでに十分な経験と知識を身につけた有能なエリートであった。他の政治エリートと同様、評定官の家族のネットワークは強く、また、他の行政部門の家族とも広範なネットワークをもっている (p. 61)。

### 政治的見解

評定官の政治的見解をみると、ボナパルティストはわずかしかない。最も重要なのはオルレアニストで、彼らの帝政に対する見方として、ライトは次のように述べている。

「多くのオルレアニストにとって、七月王政は社会的・政治的進歩の時代であった。国の重要な名望家として、彼らは行政、議会そして地方における正統王朝派の古い枠組みを取り替えた。彼らはオルレアン家よりもむしろ同家と結びついている政治制度に愛着をもっていたので、新しい帝政を受け入れることを不都合とは思わなかった」 (p. 77)。

また、オルレアニストの精神状態として次のように指摘している。

「七月王政下においては、オルレアニストは政治的には保守主義者と自由主義者に分かれていたが、他の問題においては、かなり驚くべき見解の一致が存在した。ブルジョワジーの支配、保護主義、安価な政府、ガリカニズム、そしてとりわけ議会主義が、オルレアニストに精神状態の独自性をつくりあげていた」 (p. 79)。

しかし、帝政下の実際の行動においては、評定官は基本的に非政治的な態度をとった。

### 宗教的見解

宗教的には、評定官の多数を占めたのは、穏健なガリカニズムであった。彼らの考えは次のようなものであった。「教会は果たすべき役割を持っている。この役割は、社会的分野、慈善そして教育の分野——特に若い女性にとって——で重要である。教会は無秩序に対する防壁になるし、不満のはけ口となり、大衆の行きすぎに対する安全弁となる。しかし、教会の権力はコントロールされなければならない。その権力が拡大するのを押えねばならない。しかし、あまりやりすぎて弱体化させてはならない。なぜなら、それはあまりにも有益な社会的制度であるからである」 (p. 90)。

### 他の中央機関との関係

中央機関として、コンセイユは皇帝と大臣とどのような関係にあったのか。大臣たちとコンセイユのあいだにはたえざる緊張が存在していた。コンセイユは、大臣の法案を修正する権限をもっており、しばしばそれを使った。しかし、皇帝と大臣がゆずらなかった場合、コンセイユは最終的には折れた (p. 119)。大臣は、コンセイユの反対が強いと予想される場合には、無任所評定官を動員することで対応する。彼らは高級官僚でコンセイユへの帰属意識はなく、しかも総会での議決権をもっていたからである (p. 131)。

コンセイユは立法院とは二度接触する。議会委員会（立法院）による修正案をめぐって討論と採決をおこなうとき、政府案を立法院で擁護するときで、激しい議論の応酬と対立があった。しかし、1869年9月8日の元老院決議によって、コンセイユは立法院の修正案に対する統制権を奪われ、意見の表明をおこなうだけとなった。帝政末にかけて、コンセイユの権力は立法院に対して衰退する一方で、行政裁判と諮問委員会の役割に限定されるようになる (pp. 155-156)。

### 専門化と非政治化

時の経過とともに、コンセイユは専門性を高め、年功序列化を進めていった。年功序列の原則の浸透は、皇帝の任命権との争いにおいてコンセイユの独立性を高めた (p. 47)。このことは、帝政後半にコンセイユ内の調査官が、空席のできた評定官に任命されるようになることにあらわれている。評定官任命時点で調査官であった者は、1852年には2名（評定官合計40名）だけであったが、1860年には14名（同48名）、1870年には22名（同50名）に達している。1852-1870年の合計は31名で2位の代議士の19名よりかなり多い。1870年の評定官の任命直前の職業をみると、調査官22名、知事8名、官僚8名、代議士5名、軍人3名、司法官2名、外交官と第二共和政期の評定官が各1名となっており、調査官が圧倒的に多く、44%を占めている (p. 52)。帝政末期には、より合理的で公平な評定官の任命がなされるようになり、任命に際しては、行政上の経験が政治的な評判にとって代わるようになった。それとともに、コンセイユは国家に対する個人の権利の擁護者になっていき、コンセイユ・デタは、第二帝政末期に近代的行政機関として発展していくことになる (p. 167)。

ナポレオンはコンセイユ内の傍聴官制を高級官僚養成学校にしようとしていたが、コンセイユが行政裁判所と諮問機関になっていき、専門化が進行するにつれ、傍聴官制はコンセイユの評定官養成の役割を担うようになる (p. 187)。これはちょうど県参事会が知事の養成学校になったのに対応しているといえよう。どちらも最初政治と行政の両面にかかわっていたにもかかわらず、専門化と非政治化が進行し、近代的行政機関として国家のなかに位置づけられていった。県行政の整備と同様、中央集権的な行政機構の整備は、すこしずつ名望家の媒介を必要と

する場面を減らしていくことになるだろう。

## 第4章 代議士・名望家・帝政

本章では、エリック・アンソーの大著『第二帝政の代議士たち ― 19世紀のエリートのプロソグラフィ ―』<sup>(34)</sup>を中心にして、立法院の代議士たちと帝政と名望家の関係を探っていききたい（なお、煩瑣をさけるため、第4章における本書からの引用はすべて本文のなかに括弧付きで該当ページを示し、註は本書以外の文献の引用に限った）。アンソーは、クーデタ以後帝政末までに選出された総計613名の立法院代議士のデータを元に、第二帝政期の政治史を再構成している。このうち官選候補者が圧倒的に多くて520名（全体の84.83%）、政府に公認されずに当選した代議士が93名である。アンソーは、この613名の代議士一人一人について、全部で155にのぼる項目からなるデータを作成している。彼は、この膨大なデータをコンピューターを駆使して解析し、今まで不明であったり、あるいは気づかれていなかった多くの興味深い事実を明らかにしている。しかし、ここでは代議士と名望家と帝政の关系到絞って検討していきたい。

### 代議士と家族

まず、613名の代議士の家族についての分析がなされている。表4は、第二帝政期の代議士の出身階層の割合の変化を、選挙があった年ごとにみたものである。まず、貴族の出身の割合が非常に高く、1857年には半分近くが貴族であった。つねに貴族の割合が最も高いとしても、他方では帝政期を通じて貴族の割合の低下と大ブルジョワジーの上昇が明瞭である。それに対して、中産ブルジョワジーと小ブルジョワジーそれに下層階級の出身はあまり変化していない。これらの傾向は知事の場合と似ている<sup>(35)</sup>。

他方、貴族の出身では、第一帝政の貴族の出身も存在するが、アンシャン・レژیームまで遡る貴族が中心である（p.81）。この点で、第一帝政の貴族が多い知事の場合とは異なる。代議士とコンセイユ・デタの評定官の出身階層を比較すると、代議士の場合は、貴族出身と下層の階層（小ブルジョワジー、下層）が多く、コンセイユ・デタの場合は、中流ブルジョワジー出

表4 代議士の出身階層の割合の選挙ごとの変化（p.83）

（単位：％）

出身階層	1852年	1857年	1863年	1869年
貴族	43.08	46.08	38.08	31.95
大ブルジョワジー	12.31	11.60	18.51	21.52
中流ブルジョワジー	20.77	20.22	23.84	21.87
小ブルジョワジー	16.15	16.10	15.30	18.06
下層出身	7.69	5.99	4.27	6.60
合計	100.00	99.99	100.00	100.00

身が多い<sup>(36)</sup>。

出生地はセーヌ県出身が圧倒的に多く 136 名 (22.19%)、そのなかでパリは 131 名 (21.37%) で、他の政治エリートでは、コンセイユ・デタの評定官が 26.89%、知事が 20.45% である<sup>(37)</sup>。代議士は、県を選挙区とする普通選挙によって選出されているにもかかわらず、パリ出身の割合が高いといえよう。これは、政治エリートにとってパリが決定的な意味をもっていたこと示している。さらに、地方出身でもほとんどの場合高等教育はパリで受けていることを考えると、パリのもつ意味はさらに重くなる。

代議士にとって家族は非常に重要であった。それは「家族によって獲得され、維持されてきた、経験、人間関係そして名声が決定的な切り札となる」(p. 153) からであった。アンソーは、父が名望家であった代議士を少なくとも 202 名 (32.95%) と見積もっている (pp. 150-151)。3 人に 1 人が名望家の出身であることになる。父親が代議士であった者は 132 名 (21.53%) である (p. 147)。「直系尊属に代議士をもつ第二帝政期の代議士に、傍系親族に少なくとも一人の代議士をもつ代議士を加えるなら、〈相続者〉の全体は、353 名となり、代議士全体の実に 57.59% を占めている」(p. 173)。これは、支配階層の存在を歴然と示しているといえるだろう。

他方、子どもの数を見ると、第二帝政期の代議士の 2 人に 1 人以上 (53.78%) は、子どもが 3 人以下（とくに 2 人と 3 人）の家族出身であるのに対し、七月王政期の名望家の家族は 3 人に 1 人 (36.81%) のみである。逆に、子どもの非常に多い家族出身の代議士は、第二帝政下ではまれである (p. 156)。これは、第二帝政の代議士が生まれた家族が、子どもに対する新しい感性をもっていたことを示している。当時の政治エリートの家族のなかに、家族に対する近代的な新しい感性が出現していたといえよう。

さらに、代議士の息子で地方議会に参加しているのは、合計 175 人に及ぶ。これは、成人の息子をもっている代議士の 3 分の 1 (32.46%) に達する。175 人中 163 人 (93.14%) は、父親が代議士に選出された県でその地位についている。そして、すくなくとも 105 名 (58.86%) は、その後父のあとを継いでいる (pp. 239-240)。代議士はその選挙において、自分の才能と同じくさまざまな資本、出身の家族環境、彼が属しているネットワークなどにも依存していた (p. 249)。

しかし、帝政期の代議士の孫をみると、多くの場合、孫の代にはすでに連続性が切れている。一般に第二帝政では、政治的遺産は一つの切り札であったが、第二帝政以後、時代や体制を越えて持続する政治的家族はまれになる (p. 245)。これは第三共和政になって、名望家の支配が終焉したことを示しているのか、あるいはデモクラシーの浸透の結果を示しているのだろうか。あるいはまたその両方であったと考えるべきであろうか。

しかし、官選候補者に選ばれるために必要とされることは、職業生活でその結果を出してい

ること、また、慈善行為で際立っていることであり、これはやはり家族の政治遺産だけでなく、能力主義的な側面の必要も示しているといえよう (p. 249)。

## 教 育

代議士の 95.54% が中等教育を受けていた。1852 年時点で中等教育を受けている生徒数は、全国で 30,000 名だけで、これは全少年の 3% 以下であった。また、代議士の 80.04% が高等教育を受けている。他の政治エリートと比較すると代議士の受けた教育は 19 世紀のエリートの平均であったといえよう (pp. 256-257)。ただ、中等教育への進学率にみられるように、エリートとそうでない者とのあいだの溝は決定的に深い。

代議士のなかで、最も高学歴な社会層は第一帝政と王政復古期の新貴族出身で、9 割が高等教育を受けている (p. 269)。逆に、高学歴でない社会階層は、旧貴族と下層出身で、前者は 4 分の 1 近くが中等教育まで、下層出身者は、6 分の 1 以上が初等教育しか受けていない。高学歴の旧貴族が少ないのは、彼らが相続した経済的資本と人脈のゆえに、高学歴をそれほど必要としないからであった (pp. 269-270)。

大学では法学部が圧倒的に多く、7 割 (69.27%) に近い (p. 262)。陸軍士官学校出の代議士の 4 分の 3 は、貴族の出身である。理工科大学出の代議士は、6 割がブルジョワジー出身で、3 分の 1 が貴族出身である (pp. 275-276)。

以上のように、代議士にとって高学歴が前提となっている。そういう意味で能力主義が拡大しつつあるといえる。しかし、学歴による社会的上昇には限界もあった。それは知識と教養の問題であり、家族の出身階層の問題である。「卒業証書によって社会的上昇を遂げることと、受け入れられることとは、実際、まったく異なる二つのことである。教育を受けることは、しばしば教養を身につけるよりもやさしい。文化は大部分、学校教育の外で獲得される知識である。学校教育は、もっとずっと重要な切り札に比べれば、表面的なものにすぎない。その切り札というのは、名前であったり、家族のネットワークであったり、あるいは財産そのものである」(p. 285)。たとえば、オリヴィエは、芸術について次のように述べている。「芸術はまことに社会的に非常に大きな有用性をもっている。それは、意見の多様性によって対立している教養ある人びとのあいだで調停者の役割を果たす」(p. 440)。ここには、社会層の違いや財産の差あるいは政治的意見の相違を越えて、ひとつの文化を共有していた教養人の存在が示されている。これが支配層とそうでない者を区別していた。

## 職 業

代議士になった時点での職業は次の通りである。地主あるいは農業家が 180 名 (29.36%)、弁護士が 83 名 (13.54%)、産業家が 68 名 (11.09%)、高級官僚が 68 名 (11.09%)、卸売り商

人が33名(5.38%)、士官が26名(4.24%)、司法官が24名(3.59%)、銀行家が17名(2.77%)、将官が16名(2.61%)、宮廷職が14名(2.28%)、実業家が14名(2.28%)、公証人が12名(1.96%)、ジャーナリストが12名(1.96%)、医者あるいは外科医が11名(1.79%)、技術者が8名(1.31%)、文学者が7名(1.14%)など。小ブルジョワジーの職業は零、下層階級の職業は1名(pp. 294-295)。「立法院の議員の職業構成の特徴は、最も民衆的な職業の不在と、生産と交換手段の所有者(地主、農業土地所有者から産業家、卸売り商人、実業家そして銀行家まで)が非常に高い割合を示している点にある」(p. 301)。これは代議士の世界が、中流ブルジョワジー以下の大多数の人びととは切れた世界であることを明瞭に示している。他方、世紀末の第三共和政の議員は、第二帝政の代議士と比較と、地主と産業家および実業家の割合が低下し、医者、特に弁護士の割合が高くなっている(p. 300)。

ただ注目すべきは、この時代のすべての大企業、経済活動の全部門が、立法院に代表されていることである。銀行であれ、鉄道であれ、鉱山や冶金あるいは保険であれ、それらの企業の重役会において代議士の名前を見いだすことができる(p. 325)。また、代議士は商工会議所や農事共進会をはじめとする経済関係のあらゆる組織に属しており、多くは議長席にあった(pp. 319-322)。また、フランス北部と東北部においては、貴族も自ら工場や製鉄所の経営者へと転換している場合もみられる(p. 584)。これは、状況に対応して名望家が自ら変化していったことを示しており、もはや伝統的名望家から遠い存在といえよう。

このように、立法院の代議士のなかに、政治と経済の密接な関係がみられたが、そのことを象徴的に示しているのが、立法院議長に任命されたシュネデルである。彼はル・クルゾーの冶金工業の経営者で、巨万の富を築いた産業界の指導者であったが、立法院議長に産業界の代表が任命されたのは彼が最初であった。このことは、帝政が名望家支配に依拠しつつも、方向性において経済の近代化をめざしていたことを示している。シュネデル自身、大名望家であり、かつ近代的大企業の経営者であった。

## 財 産

財産の観点からみると、代議士の親は他のエリートと比べても裕福である(p. 464)。代議士の収入は県会議員や知事に比べて高く、県会議員を兼ねる代議士の方が県会議員のみより平均でははるかに収入が多い(p. 478)。他のエリートに比べて、帝政の代議士がとくに不動産を好む点に特徴がある。613名の代議士のうち303人(49.43%)が大きくすばらしい城館を所有していた(p. 496)。

19世紀において、富は社会的地位の最重要な要素の一つであった。「人は『富のなかに、信望の保証、独立の保証、社会的影響力のしるし』をみた。この富が、尊厳を与え、なんびとによっても強制されないことを可能にし、それをもっている人にその権威を保証する手段を与え、

彼のまわりに良きことをもたらす。無私が一つの徳であるなら、富は政治家にとってなおさら重要な切り札となる。富のみがしばしばわずかな報酬で、一つあるいはいくつかの責任を担うことを可能にするからである (p. 505)。

また、政治家としての代議士にとって、家族の伝統が重要な意味をもっていた。「家族の伝統がこの分野では基本的な役割を果たす。ハビトゥスが多くの職業の起源にある。家族のネットワークと指導階級の社交性によって与えられる人脈という資本が、重要な切り札になる。公職にある男の息子は、自分がやがて引き受けるべき社会的責任をもっているという考えのなかで大きくなる。しばしば彼は自分自身に使命が与えられていると思う。彼が政治的伝統を引き継ぐのは自然にみえる」(p. 523)。これは伝統的な名望家の心性であろう。

### 代議士とローカルな世界

代議士は普通選挙によって選出される以上、当然ローカルな関係が重要である。「代議士は選挙民と国家の間の仲介者である。彼は、同時に、守護者であり庇護者であり助言者であることが要求される。彼に対する信頼として彼が得る敬意が、その代価である」(p. 715)。

したがって、当然、県会、市町村会といったローカルな組織と密接な関係があった。とくに、代議士はこれらの地方議会の議員や市町村長を兼ねていたのになおさらであった。次の表5は、地方議会の議員や市町村長を兼任している代議士を、第二帝政期とそれ以前とで比較したものである。

第二帝政の代議士で地方議会の議員や市町村長を兼ねている者は、それ以前に比べて突出している。第二帝政期のほとんどの代議士 (84.34%) が、何らかの地方議会のポストについているが、なかでも県会議員を兼ねている者は、8割に近いこと、また市町村長を兼任している代議士も4割を超えている。郡会に関しては第二帝政期もそれ以前もほとんど関心をもたれていない。地方議会の議員を兼ねる代議士は、時代とともに増加し、帝政最後の1869年の立法院選挙では、1852年以来最高の85.76%に達した。また、代議士=県会議員の兼職と、代議士=県会議員=市町村長の兼職のパターンが多かった (p. 735)。

県会当たり平均32.82人の県会議員がいたが<sup>(38)</sup>、県会に平均5.53人の代議士(元代議士も含む)が含まれていた (p. 739)。ここにさらに、第1章でみたように、大臣、元老院議員、

表5 地方議員や市町村長を兼任している代議士の割合 (p. 733)

( ) 内は%

議員の種類	1852年以前	1852-1870年
何らかの議員	317 (51.71)	517 (84.34)
県 会 議 員	217 (35.40)	481 (78.47)
市 町 村 長	136 (22.19)	260 (42.41)
郡 会 議 員	45 ( 7.34)	36 ( 5.87)

コンセイユ・デタの評定官ら多くの政府高官が加わり、しばしば県会議長の職にあった。

帝政は、官選候補制を通して新しい人びとを選出することによって、名望家支配を脱しようとしたが、結局、地域の名望家に依存せざるをえない場合が多かった。「1852年において、政府は新しい人びとに官選候補の公認を与えようとしたにもかかわらず、どうしても過去を一掃することができなかった。それは、…政府が威信のある人物の保証を受けることを願っていたからであり、適切な人物を見つけることができなかったからであり、しばしば旧代議士に頼らざるをえなかったからであるが、しかしとくに政府が求めたのが地方議会の議員であったからである。この後者の大部分は、実際、十分知られており、また中央の議員よりも政治的に危険でないという利点をもっていた」(p. 736)。

地域の名望家のなかでも、貴族が強い影響力をもっていた。「第二帝政のすべての代議士のなかで、貴族は地域と県の公職に相対的に最も専念している人びとである。彼らは県会に多くの議員を擁し、ある者は大都市の市長になることを受け入れている。しかし、ブルジョワジーや下層出身の代議士に比べて、最も印象的なことは、彼らが占めている小都市の市長と村長の地位である。ローカルな委任を受ける人はとくにその社会的地位、影響力によって選ばれるのであって、その思想によってではない。県会議員、郡会議員、あるいは大都市の市長に当てはまることは、より低い次元においてはなおいっそう真実である。人びとは、彼が彼らの利益を守ることを期待している。生まれつきの保護者である貴族以上に、誰がこの任務を果たせるだろうか。狭い地域では、市町村長の職はしばしば貴族の家族の父から息子へ移譲される。それほど重くないこの任務を避けることは、彼の条件に受け継がれている義務の一つを負うことを拒否することになり、家族の影響力をそれだけ弱めることになるだろう」(pp. 744-745)。

貴族が、彼らの権力の源としての地域にきわめて強い執着をもっていたことは、次のような事実にあらわれている。「貴族出身の代議士の90.75%が、一つ以上の地方議会の議員を兼ねていたが、貴族でない代議士の兼職は80.57%でしかなかった」(p. 744)。また、名望家である大地主が、それはしばしば貴族であったが、県会のなかで支配的グループをなしており、また最も多く村長に任命されていた(p. 746)。

他方、新しい代議士たちに対し、政府ははやくから地域への根づきを要求し、非常にしばしば、代議士は、まず県会議員になり、次いで市町村長になった(pp. 736-737)。

県会の会期は短く、年一回開かれるだけであった。それゆえ、骨の折れる仕事ではなかった。代議士はそこで他の名望家や立法院の同僚、またしばしば元老院議員や大臣と接触した。それは、同郷同士のあいだで、隣人として会い、友情の絆を結び、あるいは関心のある計画を促進する機会でもあった(p. 739)。



### 名望家と新人

官選候補者（520名）には2つのグループが存在していた。ひとつは名望家であり、もうひとつは「新人」であった（p.795）。前述のように、父親が名望家である代議士はすくなくとも202名おり、これは全体の3人に1人（32.95%）であった。彼らは地方において強固な地盤をもち、名望家支配を維持しようとした。第二帝政は、結局、彼らの支配の上にしか統治をおこなうことができなかったが、しかし、経済をはじめとする、さまざまな近代化政策が彼らの基盤を掘り崩しつつあった。さらに、帝政が正当性の原理としている普通選挙の浸透が、徐々に名望家支配に影響を及ぼしていくことになる。アンソーは、ゆっくりとではあるが、第二帝政期に名望家の衰退が始まったと結論している。

「制限選挙王政期に伝統的な名望家の全盛期を迎えたが、第二帝政期には彼らの衰退が始まる。多くの地域で、これらの人びとが選出され続けたのは、ただ普通選挙がなお幼児期にあり、農村の選挙民がまったく自由ではなかったためであった。選挙戦にますます積極的に参加せざるをえなくなり、また彼らの敵の攻撃に身をさらすことを余儀なくされて、彼らは自分たちの威信の一部を失った。とくに、権力は、可能な場合、官選候補の公認をもっと確かな候補に与えることを望んでいたのである」（p.796）。

他方、官選候補のもう一つのグループである「新人」については、アンソーは次のように結論している。「これらの人びとは、大部分ブルジョワジーの出身であるが、しばしば民衆の出身もいた。彼らのなかには、長期の教育を受けた最も多くの代議士とともに、教育を続けなかった人の大部分がみられる。自らの社会的上昇を、自分自身の力だけでかちえた独学で家父長的な企業家が、このグループのなかで最も広くみられた人物のひとりである。これらの人びとはすべて、また彼らがなお指導階級に完全には一体化していないと感じている場合には、はやくそのなかにとけこみたいという意志によって特徴づけられる」（p.797）。彼らは、伝統的な名望家のような家門によらない、能力に依拠した新しい人びとを代表していたといえる。帝政は、このような「新人」を立法院に送り込むことで、名望家支配を打破しようとした。

帝政後半には立法院が政治の中心になっていく。立法院の代議士は帝政と名望家支配のまさに要に位置していたからである。一方では、彼らの多くが名望家出身であり、かつほとんどが政府公認の官選候補者であったが、他方では彼らは普通選挙によって選出され、県の利害を代表していた。このことが彼らを政治の中心にすえることになった。

1870年のオリヴィエの議会主義帝政は、一見、伝統的な名望家支配に基礎をおく、七月王政期のオルレアニストや第二共和政期の秩序党の体制への回帰に見えるが、実際には上から近代化を推進しようとする中央集権的帝政と、状況に対応して自らも変化しつつあった名望家とのあいだの妥協の産物であったというべきであろう。

## おわりに

第二帝政は名望家支配の上に権力を築かざるをえなかった。その上に立って、帝政は、普通選挙を権力の正当性の根拠とし、中央集権化を通して近代化を推進しようとした。名望家の側も、秩序を回復し維持できる権力として、帝政を受け入れた。しかし、帝政が中央集権化と近代化を推進することは、地域を支配し、地域と中央のあいだの媒介者として自らの権力を維持していた名望家の支配の基礎を掘り崩すことになる。たとえば、英仏通商条約の締結をはじめとする自由貿易政策への転換は、フランス経済の近代化を企図したものであるが、名望家の一部に打撃を与えることになった。あるいは帝政が促進した鉄道網の整備は、市場構造を変えることにより、名望家支配の基礎であった農業そのもののあり方を変えていった<sup>(39)</sup>。

第二帝政期に、ジラルールが明らかにしたように、地方の名望家支配は衰退するどころか揺るぎなかったとしても、名望家が伝統的支配をそのまま維持することは不可能であった。近代化の進展を押し止めることはできなかったし、普通選挙の浸透を阻止することもできなかった。彼らもそれに対応して変化していかざるをえなくなる。地域によっては名望家支配自体が変質していった。したがって、名望家といっても、かつての伝統的名望家とは同じではなくなっている。もちろん、全体が一様に变化したのではなく、地域によって大きな格差があった。テュデスクのいうように、帝政期に伝統的な名望家の衰退がはじまったとしても、他方では彼らは状況に適應することによって、その支配を維持したのだった。このように分析に名望家の主体性を導入することで、ジラルールとテュデスクの矛盾——名望家支配の持続か衰退か——を解明できるのではないだろうか。

第二帝政期における地方の名望家の恒常性の外観に対して、政治エリートの上層部では明らかな変化が生じていた。どの政治エリート（県会議員、知事、コンセイユ・デタ評定官、代議士）のグループでも、貴族と大ブルジョワジーからなる名望家が大半を占めていたが、しかし、そのなかで県会議員の場合を除いて、貴族の割合の減少と大ブルジョワジーの増加という共通の変化がみられた。第二帝政期の政治エリートにおいては、家門はなお決定的な力をもっていたが、政治・行政機関の指導的地位において徐々に能力主義的傾向が浸透していた。また、彼らのあいだに、たとえば、家族に対する近代的な新しい感性が広がっていた。さらにとくに代議士の場合に明かなように、彼らにとって経済と政治がそれまでにないような密接な関係をもっていた。その象徴が大名望家であり大企業経営者で立法院議長であったシュネデルであった。

### 注

(1) Jean Tulard (sous la direction de), *Dictionnaire du Second Empire*, Fayard, 1995.

(2) *Les patrons du Second Empire* というシリーズ名で Picard 出版社から不定期で刊行が続けられ

ている。

- (3) Eric Anceau, *Les députés du Second Empire — Prosopographie d'une élite du XIX<sup>e</sup> siècle* —, Honoré Champion, 2000. また同著者による第二帝政期の代議士の人名事典: *Le Dictionnaire des députés du Second Empire*, Presses Universitaires de Rennes, 1999.
- (4) ショワゼルの元老院に関する博士論文そのものは未刊であるが、次のような第二帝政に関する著作が公刊されている: Francis Choisel, *Bonapartisme et Gaullisme*, Albatros, 1987.
- (5) とくに、次の二著: Roger Price, *The French Second Empire: An Anatomy of Political Power*, Cambridge University Press, 2001. と *People and Politics in France 1848-1870*, Cambridge University Press, 2004.  
また、ブライスの一連の研究については、拙稿「フランス第二帝政史研究における新しい動向について——『新しい政治史』に向けて——」(本誌第124号, 2005年)を参照。
- (6) Anceau, *Les députés...*, pp. 20-21.
- (7) L. Girard, A. Prost, R. Gossez, *Les conseillers généraux en 1870*, Presses Universitaires de France, 1967.
- (8) Vincent Wright, *Le Conseil d'Etat sous le Second Empire*, Armand Colin, 1972. 本書に関しては、つとに中谷猛が詳細な紹介をおこなっている: 「フランス第二帝政の統治集団・国事院と知事団体について」『立命館法学』121-124 合併号, 1976.
- (9) Bernard Le Clère et Vincent Wright, *Les préfets du Second Empire*, Armand Colin, 1973. 中谷猛「フランス第二帝政と知事——帝政知事の社会的背景とその政治的役割——」『長崎造船大学研究報告』15 巻 2 号, 1974.
- (10) Anceau, *op. cit.* 第三共和政期に関してではあるが、長井伸仁のパリ市会議員のプロソポグラフィがある: Nobuhito Nagai, *Les conseillers municipaux de Paris sous la III<sup>e</sup> République (1871-1914)*, Publications de la Sorbonne, 2002.
- (11) André-Jean Tudesq, *Les grands notables en France (1840-1849). Etude historique d'une psychologie sociale*. Tome I et 2, Presses Universitaires de France, 1964.
- (12) Tudesq, *op. cit.*, T. 2, pp. 1230-1231.
- (13) 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』岩波書店, 1983 年, p. 32.
- (14) 同書, p. 383.
- (15) 同書, p. 374.
- (16) Tudesq, *op. cit.*, T.2, p. 1231.
- (17) Christophe Charle, *Histoire sociale de la France au XIX<sup>e</sup> siècle*, Editions du Seuil, 1991, p. 11.
- (18) *Ibid.*, pp. 97-99.
- (19) A. Plessis, *De la fête impériale au mur des fédérés, 1852-1871*, Editions du Seuil, 1973, p. 27.
- (20) Girard, *op. cit.*
- (21) Tudesq, *op. cit.*, T.2, p. 1240.
- (22) *Ibid.*, p. 1241.
- (23) *Ibid.*, p. 1231.
- (24) Anceau, *op. cit.*, p. 523.
- (25) *Ibid.*, p. 150.
- (26) Le Clère, *op. cit.*, p. 135.
- (27) *Ibid.*, p. 136.
- (28) Anceau, *op. cit.*, p. 544.
- (29) *Ibid.*, p. 64.
- (30) Le Clère, *op. cit.*
- (31) Anceau, *op. cit.*, p. 544.

- (32) *Ibid.*, p. 544.
- (33) Wright, *op. cit.*
- (34) Anceau, *op. cit.*
- (35) 第2章表1を参照。
- (36) 第3章表3を参照。
- (37) 評定官に関しては, Wright, *op. cit.*, p. 56. 知事に関しては, Le Clère, *op. cit.*, p. 176. を参照。
- (38) Girard, *op. cit.*, pp. 192-193.
- (39) 第二帝政期の農村の変容に関して, たとえば, 次のような数字が雄弁に物語っている。男子農業労働者が, 1852-1862年の10年間に1,172,000人減少している。Roger Price, "The Onset of Labour Shortage in Nineteenth-Century French Agriculture", in *The Economic History Review*, Second Series, Volume XXVIII, No. 2, p. 264. また, 1851-1871年のあいだに2,123,000人が離村している。Roger Price, *People and Politics in France 1848-1870*, Cambridge University Press, 2004, p. 50.

## Le Second Empire et la domination des notables: Essai synthétique des prosopographies des élites politiques

KINOSHITA Kenichi

Le Second Empire se trouvait face à face avec des notables en province. Nous nous proposons d'éclaircir des relations réciproques entre l'état centralisateur et la domination des notables.

Pour ce faire, nous avons profité, entre autres, des études prosopographiques des élites politiques du Second Empire (conseillers généraux, préfets, conseillers d'Etat, députés du Corps législatif).

Le Second Empire a été obligé de fonder son pouvoir sur la domination des notables. Et les notables eux-mêmes ont accepté l'Empire qui leur assurait l'ordre social.

Mais l'Empire a entrepris de développer la modernisation de la France, tout en basant son légitimité sur le suffrage universel. Le gouvernement a placé beaucoup des hommes politiques et hauts fonctionnaires dans les conseils généraux comme présidents ou conseillers et a nommé des maires. Il a aussi fait entrer, par la candidature officielle, des hommes neufs qui n'appartenaient pas aux notables dans le Corps législatif. Enfin, l'Empire a donné un grand pouvoir aux préfets pour s'affronter à la domination des notables.

La politique économique de l'Empire et le suffrage universel ont graduellement miné le fondement des notables, mais ils se sont occupés de conserver leur domination en s'adaptant aux circonstances. Les notables de la fin de l'Empire, au moins pour une partie, n'étaient plus, malgré leur apparence, des notables traditionnels de la Monarchie de Juillet.

D'autre part, il s'est produit des changements nouveaux dans une partie supérieure d'élite politique dont la moitié était composée de la noblesse et la haute bourgeoisie. D'abord, on peut constater, parmi eux, le recul de la noblesse et la progression de la haute bourgeoisie. Puis, bien que la famille eût encore le poids décisif dans la carrière politique, la tendance méritocratique pénétrait déjà dans le centre des corps politiques et administratifs. Enfin, pour eux, l'économique et le politique se sont liés plus étroitement que jamais.

**Keywords:** Le Second Empire, notable, prosopographie